

マルクス主義理論史研究の課題（Ⅲ）

——松岡・丸山・田中氏の近著によせて——

太 田 仁 樹

目 次

1. はじめに
2. 松岡利道著『ローザ・ルクセンブルク：方法・資本主義・戦争』
(第23巻第1号)
3. 丸山敬一著『マルクス主義と民族問題』 (第23巻第2号)
4. 田中良明著『バルヴスと先進国革命：第2インタナショナル・マルクス主義の到達点』 (本号)
5. マルクス主義現象解明の一環としての理論史研究 (次号)

4. 田中良明著『バルヴスと先進国革命：第2インタナショナル・マルクス主義の到達点』

バルヴスは、日本ではほとんどなじみのない人物であった。マルクス主義者の多くは正統意識が強いので、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの流れからはずれた人物にはあまり関心をもたなかった。主流の流れから外れた人物でも、ローザ・ルクセンブルクやトロツキーのような人物の名前はよく知られていたが、それは彼らが主流派マルクス主義にたいする反対派たちによってかつぎ上げられることがあったからであった。主流派は彼らにたいする攻撃を執拗に続けたので、主流派の追隨者たちも、その著作に目を通すことはなくともその名はよく知っており、固定的かつ否定的なイメー

ジをもっていたのである。もちろん、主流派に抗した反対派たちはルクセンブルクやトツキーの著作に親しんでいたし、反対派でなくてもマルクス主義に関心をもつ人々は彼らの著作を愛読していた。パルヴスの場合は、彼らとは違っていた。パルヴスを掲げる反対派運動は存在しなかったので、主流派からの非難もほとんどなかった。1960年代後半の山口和男⁽¹⁾、1970年代初頭の降旗節雄⁽²⁾、河西勝⁽³⁾の研究とゼーマンとシャルラウの著作の邦訳⁽⁴⁾が現れるまでは、その名が知られることはほとんどなかったといってよい。

論文「パルヴスの労働者民主主義論」をすでに1972年に発表されている田中氏は、わが国におけるパルヴス研究の第一人者と呼ばれるにふさわしいであろう。その氏が十数年の研究をまとめて上梓されたのが、本書である。本書の問題意識はやや長い「序」において展開されている。

パルヴスを対象とする一書を世に問うことの意義は、副題に明らかなように、パルヴスその人が「第2インタナショナル・マルクス主義の到達点」を示していると田中氏が考えているからにはほかならない。「パルヴスは、『資本主義（帝国主義）と革命』というマルクス主義の根幹をなす理論領域において、第2インタナショナル期のもっとも独創的で水準の高い理論家であり、マルクス主義思想史に聳えたつ鋭峰といってよい。したがって、パルヴスを介して第2インタナショナル期マルクス主義理論の到達点の一端を確定することが可能である。」(iv頁)しかも、「マルクス主義的先進国革命論は、第2インタナショナル期の到達点から本質的にさほど進まない地点で立ち枯れたといっても過言ではない」(同)と考える氏にとっては、第2インタナショナル期のマルクス主義の到達点を示すパルヴスを検討することは、マルクス主義革命論の総括にとっても重要な意義をもつのである。

その場合、マルクス主義理論そのものにたいする氏自身のスタンスが重要になろう。田中氏は、マルクス主義の「基本的性格はプロレタリア革命の理論／思想である……。革命理論／思想としてのマルクス主義は、主客両面における資本主義の内部崩壊論である。崩壊＝変革の主体的要因と客体的要

因がともに資本主義システムに内在している、という考えである」（ii頁）と捉えている。また、「マルクス主義的内部崩壊論の歴史的寿命が尽きたことは、どうやら明らかである」（iii頁）とも語っている。氏自身は、今日では「資本主義にとっての危機は外部との関係で生じる。資本主義は自己の存立にとって不可欠の与件である外部を、侵食・破壊することにより、危機を招来する。この外部には基本的に三つの位相がある。第1の位相は、環境的外部としての生態系である。第2の位相は、社会的／文化的的外部としての人間存立の『社会的生態系』である。第3の位相は、空間的外部としての国内外の非資本主義的領域である」（ii—iii頁）と考えている。

マルクス主義的資本主義内部崩壊論そのものの現実的妥当性はすでに失われているが、その最高の表現をパルヴスのなかに見いだすことができる、という問題設定は、マルクス主義の理論的最高峰をレーニンに見いだす通説的理解にたいする真っ向からの異論の提出であり魅力のあるものである。また、その最高の到達点に照らしてもマルクス主義の本質的部分の歴史的寿命が尽きた、ということの確認からマルクス主義理論史の分析をおこなうのも大胆なことである。

しかし田中氏は、単純な「マルクス葬送派」に与するものではない。「マルクス主義理論／思想には、読みかえられて新たな社会理論／思想に継承されるべき多くの貴重な知見がある」（iii頁）とも考えており、パルヴスの検討のなかから、上記の現代的問題状況の解明のための知見を掘り出すことも試みられている。以下、各篇別に内容を概観したい。

第1篇は、再晩年のエンゲルスの革命構想と1890年代のパルヴスの革命構想を比較している。検討の材料は、エンゲルスの場合、「フランスとドイツの農民問題」およびマルクスの『フランスの階級闘争』の新版への序文であり、パルヴスの場合、1890年代の諸論文である。

エンゲルスの2論文は、「彼の革命思想のこの時点における（したがって、

最後の)到達点を示すものである」(5頁)と位置づけられたうえで、内容的には戦略・戦術論と農業農民問題論が検討の俎上にあげられている。戦略・戦術論については、エンゲルスは日常活動による多数派形成プラス最後の決戦という重層的革命戦略を描いているが、そこには重大な欠損部分があると指摘されている。「彼は、バリケード闘争にかわる最後の決戦の戦術＝革命闘争の戦術の案出の必要性を認めてはいるが、この2篇の論文にはそれは提示されていない」(47頁)のである。農民論についても、協同組合化を主張するだけで、真に有効な農民獲得策を示してはいないとされている。そこでのエンゲルスの「到達点は、設定されている課題にたいして、いまだはるか手前にとどまっている」(41頁)というのが、著者の評価である。

つぎに著者は、この残された課題に取り組んだものとして、バルルス、カウツキー、レーニンの農民論を取り上げて検討している。結論的にはこの3者は、社会主義革命のための農民獲得策の提示という肝腎の課題については積極的成果をあげることができなかったとされる。著者は、エンゲルスを含めて4人の農民論を検討した上で、マルクス主義的農民論の一般的アポリアを鋭く摘出している。「マルクス主義的農民論では、農民を第一義的に小所有者、小生産者として捉える。これはマルクス主義の歴史＝社会把握の枠組に忠実であろうとする限り必然的である。しかし、そこから<時代遅れで没落を運命づけられた存在>、<反プロレタリア的存在>、したがって、<保護すべきでない存在>といった規定がただちに導かれ、農民獲得のための理論的自由の余地がほとんど見いだせなくなる。農民獲得は、農民自身の革命的自己否定によるか、農民との妥協によるかしかありえなくなる。前者は、個別的には可能であろうが、農民層全体を問題にする限り、ブルジョア社会・ブルジョア権力の存在という与件のもとでは一般的には困難といわざるをえない。後者(農民との妥協)は、それが本格的なものであればあるだけ、プロレタリア革命の原則の侵犯になるという矛盾におちいる。」(68-69頁)マルクス主義者たちは結局この「袋小路」を突破しえなかったのであ

る。

マルクス・エンゲルスの農民論については、すでに星野中のすぐれた研究⁽⁵⁾があるが、本書の分析は、それに続くマルクス主義者たちもこの問題を解決できなかったことを、説得的に明らかにしたことで、問題はマルクス主義的「歴史＝社会把握の枠組」そのものにあることを示唆するもので、今後の研究の方向を示すものといえよう。

パルヴスの戦略・戦術論については、「大衆ストライキ論」が検討されている。有効な農民政策を見だしえなかったパルヴスにとっては、革命はプロレタリア単独革命でしかありえず、その際に闘争戦術として提起されたのが大衆ストライキであった。その場合、著者が注目するのは、社会民主党と労働組合との関係についてのパルヴスの独自の主張である。彼は、両者は基本的に同権であり、労働者階級組織としての純度は労働組合のほうが高い、と考えている。これは当時の社会民主党内では稀有な見解である（101頁）。この両者に共通の革命的潜勢力の顕在化をもたらすものとして提起されたのが8時間労働日闘争であった。

第2篇は、修正主義の提唱者ベルンシュタインの連続論文「社会主義の諸問題」（1896-1898年）と最初の修正主義批判となったパルヴスの連続論文「E. ベルンシュタインの社会主義の転覆」が検討される。

ベルンシュタインの主張は1899年の著作『社会主義の諸問題と社会民主主義の任務』に代表されることが多いが、論争の発端となった連続論文そのものを検討し、ベルンシュタインの議論の特徴を明らかにしている点に本書のメリットがある。この点は、わが国の研究史の空白を埋める著者の貢献である。

「諸問題」はその出発点においては、フェビアン社会主義と社会民主党正統派とを両面批判することを主題としていたが、後にベルンシュタイン自身がフェビアン批判を隠蔽することになった。この点はベルンシュタインの

「転向」と関連しているという。さらに、その「転向」は突然のものではなく、90年代中頃からの数年間を費やして行われたものであるが、「諸問題」第7論文によって最初の明確な表現が与えられたと、この論文の意義が確定されている。

しかし、著者は第7論文の内容そのものを高く評価するわけではない。「やや極端化して整理すれば、第六論文までは示唆に富む内在的批判であったが、第七論文にいたって、粗雑な外在的批判に転化したということである。……彼の粗雑な理論化のために、彼の問題提起は、その有する深刻な意味をくみとるまでもなく、伝統的な正統派理論によっていちおうは批判することが可能となったのである」（144-145頁）というのが著者の評価である。

著者がベルンシュタイン論文のなかで目を留めているのは、変革主体の形成・陶冶にかんする彼の見解である。「社会主義社会における分権化とそれを支える成員の社会的責任の自覚と自助の精神の必要ということについては、伝統的なマルクス主義的社会主義論においても認められているであろう。ただ、ベルンシュタインは（明言はしていないが）、社会的責任の自覚と自助の精神の涵養には「外部注入」が必要であると見なしていたようであり、これにたいして、伝統的なマルクス主義理論では、解放された労働者階級はそのような自覚と精神をおのずからわがものにする、と見なされていた。この相違は小さくない。」（130頁）

パルヴスのベルンシュタイン批判は、一定の説得力をもつものであったが、その性格は「外在的観点からの密着批判」であった、と著者は規定する。「外在的観点とは具体的には、プロレタリア階級闘争＝プロレタリア革命＝プロレタリア独裁というパルヴスの基本的立場のことである。密着批判とは、ベルンシュタインの個々の発言に密着した批判ということである。」（182頁）そして、このような批判がそれなりの説得力をもっているのは、ベルンシュタインの側にもそれを許すような弱点があったからであるとされ

る。結局、パルヴスの議論には（およびそれを規定したベルンシュタインの議論にも）見るべきものはあまりない」（同）との評価が与えられる。

さらに、著者によれば、パルヴスにおいては修正主義の発生の主体的根拠についての十分な省察が欠けている。パルヴスは、日和見主義＝右派イデオロギーの強力さを認識しており、それはアウアー批判として当時の社会民主党の体質批判となりえていたのだが、それをベルンシュタインの修正主義にたいする批判に活かすことができなかった。それは、社会民主党と労働者階級の階級的＝革命的本質についての「彼の確信のいわば先験的基礎の部分の規制力の強さを物語っている」（184頁）。

第3篇では、パルヴスの帝国主義認識の分析がおこなわれている。パルヴス説検討の背後には、ヒルファディング、ルクセンブルク、レーニンの古典的帝国主義論との比較が念頭におかれている。

パルヴスの帝国主義認識は、1902年のドイツ関税法制定以降の自由貿易の後退に端を発し、1907年から1910年の諸論文で、その全貌をあらわにする。パルヴスの資本主義／帝国主義認識は世界資本主義的なものである。彼は、一国経済の構造分析には熱心でなく、一国経済については、対外膨張の必然性（先進国）、資本主義化と世界経済への編入の必然性（後進国）を示せばよい、と見なしている。したがって、一般的経済理論あるいは金融資本的経済構造論は欠如している。だが、著者はこの欠如は副次的なものであるという。「彼の帝国主義の経済論は、基軸国の交替をとまなう資本主義の生産力の飛躍的發展と資本主義のなみなみならぬ生命力を、長大な射程のなかで予測するものである。今日にいたる20世紀資本主義の發展動向に照らせば、彼のこの議論はむしろ積極的に評価されるべきである。」（244頁）この場合、「欠如」にもかかわらず積極面がありえたのか、「欠如」ゆえに積極面がありえたのか、問題となるところである。

著者は帝国主義認識は革命構想と結びつけて検討すべきであるという立場

をとっている。パルヴスにおいて、帝国主義にかんする経済論の成立に対応した革命構想は、如何なるものであったであろうか。

パルヴスの革命構想の基本線は、プロレタリアートの政治的分離＝プロレタリアートの階級的利害の徹底的追求という90年代の戦術にかわる、プロレタリアートの階級闘争という基礎に立つ民主主義派の結集による資本家階級の孤立化＝社会的包囲の戦術である。その場合、注目すべきは農民評価の変更である。従来のパルヴスの農民論は、保守的小所有者という農民の所有論的規定へのこだわりが少ないものであったが、農民の自立的運動を積極的に評価しようというものではなかった。この時期には、「農民没落不可避論が否定されているわけではないが、農民の自立的な社会的前進運動が開始された、という認識である。農民を（未来のプロレタリアとしてではなく）農民のまま獲得しようという認識に近いといってよい」（254頁）というものである。

このような構想の変化はまた、従来の大衆ストライキ論の放棄をも意味していた。この点の指摘は、急進左派としてルクセンブルクと一緒に論じられることの多かったパルヴスの個性を摘出するもので貴重である。「パルヴスはルクセンブルクとは異なり、あくまでも社会民主党と労働組合（に組織された大衆）を革命の担い手と見なしている。その背後には、革命闘争は長期、複雑な過程であり、組織的に訓練された労働者でなければ任に耐えれない、という認識がある」（259頁）。とはいえ、パルヴス自身が、労働者階級を革命の主導階級として形成する実態に即した具体的方策をもっていない、ということは否認しがたい事実であるということも、冷静に指摘されている。

著者によれば、パルヴスの帝国主義認識を評価する場合には次の2点に注意すべきであるという。第1に古典的帝国主義論は、いずれの論者の場合においても、社会変革の実践と緊密にむすびつけられて構想されており、その評価に際しては経済論だけでなく、政治論（戦略・戦術論）もふくめて検討されるべきであるが、まさにこの領域で、パルヴスはすばらしい達成を示し

ている。第2に、[帝国主義＝資本主義の最後の段階] 命題は、古典的帝国主義論評価の基準として、現在ではもはや絶対化されるべきではない。むしろ否定的に捉え返されてしかるべきである。この新たな立場から見れば、パルヴスの帝国主義認識には積極的に評価されるべきものがある。(268頁)

結論的には次のような評価が与えられる。「パルヴスは経済論において、現在にいたる資本主義の発展のいくつかの側面を予測している。資本主義の生産力発展能力の評価、基軸国（地域）の交替の主張などである。……また資本主義の存続可能性を前提にして革命の構想を描いている。この2点はパルヴスの帝国主義認識の特筆すべき現代的意義であると筆者は考える。この現代的意義ということにおいて、パルヴスの帝国主義認識は第2インターナショナル期マルクス主義の資本主義／帝国主義認識の領域における最高の達成といって過言ではないであろう。」(269頁)

以上が本書の梗概である。以下では、帝国主義認識についての著者の捉え方を中心に、本書によって触発された論点を書き記してみたい。

わが国では、マルクス以後のマルクス経済学の歴史を「帝国主義論史」と呼ぶのが通例である。この呼称そのものが、マルクスの生きていた時代は『資本論』で把握することができ、それ以後の時代は独占資本あるいは金融資本の時代であり、それはレーニン『帝国主義論』によって把握することが可能であるという理解を前提とするものであった。『帝国主義論』を、ロシア・マルクス主義の流れにそって国家独占資本主義論や全般的危機論につながるにしても、スターリン主義に抗して宇野理論につながるにしても、マルクス経済学の本流は『帝国主義論』を経過しなければならないとされていた。『帝国主義論』こそマルクス以後のマルクス主義の最高峰なのであり、現代資本主義論は『帝国主義論』を踏まえて形成されるべきであり、学説史研究はそのような理解に傍証をあたえるべきものである、と考えられていたのである。

本書は、ヒルファディング、レーニンというマルクス経済学の主流にたいして、パルヴスの帝国主義認識を「第2インタナショナル・マルクス主義の資本主義／帝国主義認識の領域における最高の達成」として対置している。通説的なマルクス経済学史の理解にたいするまっこうからの異論の提出である。この点にまず本書の第1の特徴がある。ここから、パルヴスの何をもって「最高の達成」というのかという、検討すべき第1の論点が浮かび上がってくる。

この評価の問題を考える際には、著者の帝国主義論にたいするアプローチの仕方をみる必要があるだろう。少々ながくなるが引用してみよう。まず著者は、古典的帝国主義論の形成の背景を、次のように考えていた。「19世紀末以降、帝国主義段階への移行にともなって、従来のマルクス主義の理論によっては、ただちには説明しえないさまざまな現象があらわれてくる。社会民主党内部においても、これらの帝国主義的諸現象の把握とそれへの対応をめぐって、さまざまな論争が展開されることになる。このような現象を資本主義の総体的変貌という観点からいちやく捉えようとしたのがベルンシュタインである。……これにたいして、さまざまな批判が展開されるが、初期においては、主として、マルクス主義からの離反を論難するという消極的批判にとどまっている。とりわけ、理論上の最高権威と目されていたカウツキーにおいて、この傾向がいちじるしい。ベルンシュタインなどの修正派の主張にたいする積極的批判が要請されていたのである。この要請に応えようとしたのが、古典的帝国主義である。したがって、それは、修正主義者がマルクス主義の理論的妥当性の否認と革命の必然性の否定の根拠とした諸現象に新たな経済理論的説明を与え、それらの現象のなかに革命の現実性を発見することを固有の課題にしているのである。したがって、古典的帝国主義論は、革命の現実性の提示によって総括される必要があり、経済理論としては自己完結しえない構造をもっているのである。」(192-193頁)

著者はこのように帝国主義論を捉えるがゆえに、その評価においても、わ

が国の通説に見られるような、経済認識中心のものでは不十分であるとする。著者によれば、第2インターナショナル期のマルクス主義者たちは、帝国主義とは資本主義の崩壊期＝終末期という理解を共有していた。この理解には、ここで資本主義は客観的に終末する、という理論的認識と、ここで資本主義を終末させるという主体的決意とが、ないまぜになっているのである。この主体的決意は当然、資本主義終末の革命構想として表現される。つまり、帝国主義についての認識は、経済面を中心にする資本主義終末の客観的様相の叙述である「帝国主義論」と、資本主義変革論＝革命構想とを2本の柱にしているのである。したがって、この時期の諸論者の帝国主義についての態度の検討にあたって、「帝国主義論」だけを対象としたのでは、本質的に不十分なのである。(iv頁)したがって、帝国主義認識は、経済理論とそれを基礎にして構築される政治論（戦略論・戦術論）とのセットで把握されなければならない。この視角は、古典的帝国主義研究をもっぱら経済学史のなかで取り扱ってきた、わが国の通説と異なったものである。この視角によって、パルヴスの帝国主義認識は高く評価されるのである。

しかし、本書執筆時の著者の問題関心は、パルヴスを古典的帝国主義の枠組のなかに位置づけるというだけではない。著者によれば、今日では、古典マルクス主義的帝国主義論は妥当性も説得性も失っている。今日の危機はそれらが捉えたものとは別の方向からやってくる。「生態学的危機を底辺の一つとするこの新たな危機を総体的に捉える新たな危機論（崩壊論）と資本主義論の構築が、現在の基本的な理論的・思想的課題である」(194頁)と著者は考えている。このような問題関心のもとに、「パルヴスのなかに古典的帝国主義論の理論的圏域をこえる認識の存在を探求する」(同)という視角が提示される。「具体的には、古典的帝国主義論のパラダイムである[帝国主義＝資本主義の最後の段階] 命題から彼がどの程度自由であるか、がそれである」(同)。この第2の視角は、著者が1980年代になって獲得したものであるが、さきにもた1970年代以来の第1の評価の視角とどう関連するのか、検討

すべき第2の論点になろう。

さらに、上記二つの視角からの著者によるバルブスの分析によって、著者がいう3層の危機を捉えうる「新たな社会理論／思想」に継承されるべき知見をどのように汲み取りうるのかという問題が残されている。この点が、検討すべき第3の論点となろう。

まず、帝国主義認識を経済論と革命構想のセットとしてとらえるという視角について考えてみたい。このような視角は真っ当なもののようにみえる。この時期に限らず、マルクス主義者たちの経済論はすべて、ある時代ある国の革命戦略・戦術は如何にあるべきかという問題に答えるために展開されたのであり、わが国のように、アカデミズムの一角に位置をしめるマルクス経済学という潮流が存在し、経済分析そのものが自足的におこなわれているという状態はなかったからである。経済論を中心とする現状把握の理論は、戦略・戦術論として提起される革命構想の基礎としてしかありえなかったし、後者はまた経済論そのものの理論的枠組を規定していたのである。それゆえ、著者がこの両者を分離することなく取り扱おうとするのはもっともなことのようにみえる。

しかし、このようなアプローチには、それにともなる欠落もあるように思われる。まず、「古典的帝国主義論は、革命の現実性の提示によって総括される」ものであり、したがって経済論と革命構想のセットで対象の認識をとらえるという、このようなアプローチは革命構想の歴史的妥当性を問うことを曖昧にし、研究対象と研究者の一体化をもたらすことになるのではないかという疑問が生ずる。本書に即していえば、左派と右派あるいは修正派との係争点である「革命の現実性」に関して、研究者が左派の立場にあらかじめ与しているのではないのかという疑念である。理論史研究は、「革命の現実性」がその時代その国にどの程度存在していたかを直接に問題にするものではない。しかし、研究者は「革命の現実性」が存在することを前提とした議

論を検討するときその前提を共有すべきではない。

19世紀末今世紀初頭のマルクス主義左派に関するわが国の研究においては、「革命の現実性」は自明のことのようになり前提されていた。これはドイツ革命の敗北の主要原因をドイツ社会民主党の当時の指導部の「誤り」にもとめる、ロシア・マルクス主義の歴史認識に沿うものであり、『帝国主義論』の歴史認識を真理とするレーニン中心主義的な見方と一致するものである。著者は、わが国のマルクス主義史研究が、レーニン中心主義であることを批判し、大胆に異論を提出している。だが著者は、レーニン中心主義は、その一系論として、ドイツ社会民主党内の諸派の評価における左派偏重の風潮を生み出していたことを見過ごしているのではないだろうか。

左派偏重の風潮は、修正主義論争においては修正派にたいしてマルクス主義的左派を評価し、マルクス主義的左派の中央派と急進左派とへの分岐においては、急進左派を高く評価するというかたちで現われている。とくにルクセンブルク評価において著しいこのような風潮は、レーニンを相対化するものと受け止められることが多いが、決してそのようなものではない。マルクス主義理論史研究におけるレーニン中心主義の一系論と考えるべきである。レーニンとロシア・マルクス主義の影響は、意識的あるいは無意識のうちに「修正主義者」ベルンシュタインや「背教者」カウツキーが当然批判されるものであることを前提としていたことにある。ルクセンブルクはその前提の上でベルンシュタインやカウツキーの批判者として積極的に評価されてきたのである。そのような態度は、正統派的理論史研究だけでなく、宇野派の立場にたつ理論史研究においても認められた。

著者のパルヴス評価はこのような前提を無意識に共有してはいないだろうか。「革命の現実性」は、左派グループの内部での共通の前提であった。古典的帝国主義論は、様々なヴァリエーションをみせているが、みなこの前提の上に議論を組み立てている。したがって、「古典的帝国主義論は革命の現実性の提示によって総括される必要」があるということは、当事者たちがそう考え

ていたということである。だが、「革命の現実性」認識を共有していない読者は、何故左派がそう考えたのかその前提をこそ問うてもらいたいのである。研究対象となる諸論者と前提を共有してしまうと、研究者が古典的帝国主義論の特徴を明らかにするといっても諸帝国主義論の論理構成の出来上りを比較するという程度のことにとどまってしまう、そこでの優位性ということも読者にとってはあまり意義のあることとは感じられない。「革命の現実性」とはあくまでも左派グループの頭のなかの存在にすぎないという立場を堅持すべきであろう。そうでなければ、古典的帝国主義論が内包していた真の問題性を見過ごすことになる。

つぎに、第2の視角でいわれている〔帝国主義＝資本主義の最後の段階〕命題にたいする距離という評価基準は、「革命の現実性」の存在を前提とする経済論と革命構想とのセット把握という視角とは根本的に相容れないのではないかという疑問が生ずる。パルヴスの20世紀資本主義論の優位性は〔帝国主義＝資本主義の最後の段階〕命題にたいする距離であるという評価基準は資本主義の生命力、発展能力の承認を評価することであった。このような評価基準は左派マルクス主義者の問題設定とは矛盾するように思われる。この矛盾は70年代の著者の立場と80年代の著者の立場の移動に起因するものなのかもしれない。これが70年代の著者の立場にみられた急進左派偏重の風潮との一致の克服が不十分であることを示すものだとすれば、残念なことである。

これと関連することだが、諸帝国主義論の形成の背景説明もまた資本主義の生命力、発展能力の承認の評価という視角と相容れないものがあるように思われる。著者は、「19世紀末以降、帝国主義段階への移行にともなって、従来のマルクス主義の理論によっては、ただちには説明しえないさまざまな現象があらわれてくる」と述べて、修正主義の登場と古典的帝国主義論の形成の背景を説明している。19世紀末になって資本主義社会に新しい現象が現れてきたのは、歴史的事実である。だが、それを「帝国主義段階への移行」と

呼ぶのは、レーニンの資本主義社会発展観を前提にした用語法ではないだろうか。「死滅しつつある資本主義」ということを含意とする「帝国主義段階」への移行という規定ではなく、資本主義の発展能力の承認の評価という視角にふさわしい、当時の資本主義についての段階規定をおこなうべきであろう。

また、[帝国主義＝資本主義の最後の段階] 命題からの距離や資本主義の生命力・生産力発展能力の承認という問題は、そもそもマルクス主義の枠内で可能なかという問題設定が必要だと思われる。

自分が生きている社会の変革に命を懸けている革命家が、その時代を「旧社会の最後の段階」であると考えことはさして不思議ではない。客観的条件が形成されていないと自分が考えているところで革命闘争を継続することのできる者はまれであるからである。マルクス主義は、そもそもある社会での革命思想の登場そのものがその社会の革命の客観的条件の成熟の反映であると考える点で、革命の必然性と現実性との一致を強調するタイプの革命思想である。マルクス主義者たちはみな、自分の生きている時代を「旧社会の最後の段階」であると考えているのではないだろうか。革命を成し遂げるといふ決意と不可分である、自分の生きている時代が革命の客観的条件の成熟している時代だという主観的な時代認識こそ、マルクス主義理論史を貫くものであり、今世紀初頭においてはそれが「帝国主義＝資本主義の最後の段階」命題として表現されたということであろう。その後のマルクス主義理論史をみると、このパターンの認識は「全般的危機」論、「全般的危機の第2段階」論とカリカチュア的に繰り返されている。

したがって、[帝国主義＝資本主義の最後の段階] 命題は、それを論証するための様々なサブ・ロジックを必要とし、そしてその論証がマルクス主義理論史の内容の大きな部分を占めているのだが、その基底にある「自分の生きている時代＝旧社会の最後の段階」という根本的な発想の20世紀初頭という時代に応じた表現形式であると捉えるべきであり、それはマルクス主義的社

会認識の最も本質的な特徴の発現であるといつてよい。マルクス主義者たちが「革命の現実性」を前提として思考しているということは、それは彼らがこの発想を共有していることを意味している。

このような発想はその時代の資本主義システムの不安定性を強調する経済論を必要とする。マルクスとエンゲルスの経済理論そのものがこのような「旧社会の最後の段階」的発想の影響を大きく受けていた。生産の社会的性格と取得の個人的性格という資本主義の「基本矛盾」論が、資本主義経済システムの脆弱性を過大視するものであるということについては、私は自著で指摘したことがあるが⁽⁶⁾、資本制大工業のダイナミズムを把握している『資本論』にも、資本主義経済システムの不安定性を過大評価する傾向がみられる。これは「革命の現実性」を論証しようというイデオロギー的要請に経済理論が大きく影響されたことを示すものであるといえよう。

パルヴスの20世紀資本主義論が、マルクスにもみられた「旧社会の最後の段階」的発想そのものを真に乗り越えているものであるならば、パルヴス自身の資本主義についての原理的把握が問われるべきであろう。マルクス主義による資本主義社会の原理的把握そのもののなかに、資本主義経済システムの脆弱性、不安定性の過大評価の傾向がはらまれており、[帝国主義＝資本主義の最後の段階]命題は、独自の「論理＝歴史説」的な説明による『資本論』の継承によって、それが増幅されたものであるからである⁽⁷⁾。

パルヴスにマルクス主義的資本主義把握にたいする原理的批判があるならば、マルクス主義的内部崩壊論を真に克服するものとして評価するに値するものである。しかし、著者の紹介によるパルヴスの20世紀資本主義論には、そのような根底的な批判は見いだせない。だとすれば、パルヴスの帝国主義認識は[帝国主義＝資本主義の最後の段階]命題というマルクス経済学の主流の論理に従っていないというだけの消極的なものにとどまるのであり、そこには積極的に評価すべきものは見いだせないのではないか。[帝国主義＝資本主義の最後の段階]命題はたしかに今日からみれば問題の多いものでは

ある。だが、如何に問題を含むものであろうとも、それは資本主義の原理的把握との関係をはっきりと自覚した論理であり、理論史研究の観点からみるならばこちらの方が意義が大きい。何故なら、そこに内包された問題性の大きさが、マルクス主義的思考様式の特徴を説明するのを助けてくれるからである。

以上の検討を踏まえると、第3の論点である今日の危機を説明する「新しい社会理論」の形成のための知見をマルクス主義のなかから汲み取るという課題も、パルヴスの帝国主義認識の検討において、どのように達成されているのか、不明のままに残ったように思われる。本書におけるパルヴスの帝国主義認識は、主流的なマルクス主義的思考とは異なってはいるが、主流的なマルクス主義的思考の問題性を説明するのに資するものをあまり含んでいないからである。

帝国主義認識の問題とは別に、修正主義論争についても、レーニン中心主義的理解の克服はもっと進められてもよいように思われる。

その一つは、マルクス主義者の側の主体的力量の増大そのものが論争を惹き起こしたという側面を重視すべきだということである。

第1インタナショナルの時代のマルクス主義者たちは、どの国においても、現実の国内政治に影響力をもちうるだけの力量はなかった過激分子の小セクトであるに過ぎなかったといえよう。マルクス主義者たちは、19世紀末になって初めてドイツにおいて国内政治にたいして一定の政治勢力であることが認められるだけの力量に到達したといえよう。

著者の指摘するようにマルクス主義は「プロレタリア革命の理論／思想」であると自己認識しているのであるが、現実のプロレタリア大衆の理論／思想であったことは歴史上まれである。マルクス主義が「プロレタリア的」と考える革命的な思想や行動は、通常のプロレタリア大衆の思想と行動とは違っていたのである。マルクス主義者が、一定の政治勢力にまでその力量を

増大させえたということは、彼ら自身が「非プロレタリア的」とみなさざるをえない行動の成果であった。注意すべきことは、マルクス主義者が「プロレタリア的」と考えている行動をとるならマルクス主義者はプロレタリア大衆のなかに影響力をもつことができなかつたのであり、プロレタリア大衆のなかに一定の影響力をもちえるようになったということは、マルクス主義者の行動が自らの考える「プロレタリア的」なものではなくなつたことを意味している、ということである。マルクス主義は「プロレタリア革命の理論／思想」であるという把握は以上の歴史的事実を踏まえて考えなおされる必要がある。ドイツ社会民主党の革命的な言辭と非革命的な行動という問題は、このマルクス主義自身が内包していた問題性の発現であつたとも考えうるのである。

マルクス主義が、大衆のかかなりの部分の支持を集めた政治勢力として成長するなら、小セクト時代の革命的言説は現実の政治行動と食い違いをみせるのは当然であろう。行動を重んじる現実政治家の大多数からみれば、左派の展開する革命的言説はほとんど意義をもたないものであつたであろう。ベルンシュタインの問題提起は、「知」と「行」との分裂を嫌いその合一をもとめる一部インテリ党員の試みであつたのではないのか。また、左派インテリ・グループによる修正主義批判は、知（＝マルクス主義理論）の内包する問題性を認識できなかった別のインテリ党員の反応に過ぎなかつたのではないのか。その点では、カウツキー、ルクセンブルク、パルヴスの間にそれほどの差はないのではないのか。「革命の現実性」はそのような左派インテリ党員の頭のなかだけにあつたので、本当の現実のなかには存在しなかつたのではないのか。ルクセンブルクや初期のパルヴスのようないわゆる「オスト・ロイテ」は、そのなかでもとくに現実離れの激しかった人たちだつたのではないのか。このような観点から論争を見直すことが必要であろう。マルクス主義者たちが、マルクス主義は「プロレタリア革命の理論／思想」であると自己認識していたことは事実である。そのこと自身のはらむ問題性を剔抉するこ

とが、マルクス主義理論史そしてマルクス主義運動史、マルクス主義体制研究の重要な課題であろう。

また、修正主義論争が、稔り少ないものであったことについて、著者は、ベルンシュタインの態度に主要な責任があるとしているが、これもそういいきっていいものであろうか。著者は、「ベルンシュタイン＝パルヴス論争は「諸問題」および「転覆」で提示された論点の深化という面ではほとんど成果をあげないままに終息するのである。その主たる責任は逃げ腰の対応に走ったベルンシュタインにあるとされねばならないであろう。……着想・問題設定は卓抜であるが、その展開・論証は不得手で小手先の議論に頼りがちなベルンシュタインの思考体質のあらわれでもあろう」（172頁）と指摘している。ベルンシュタインの展開・論証力のなさは著者のいうとおりであろうが、修正主義論争の当事者たちにおいてより重要なのは、反修正主義側の護教的態度と異端糾問的な対応であろう。マルクス主義運動に内在する護教的・異端糾問的な態度はすでにここに顕在化しているのである。護教的・異端糾問的な態度は狭義のマルクス主義理論史の対象とはなりえないが、マルクス主義理論の変遷を考える上で考慮にいれなければならない重要問題である。この点も今後のマルクス主義研究の一課題である。

「革命の現実性」を前提として経済論と革命構想をセットで捉えるという視角、[帝国主義＝資本主義の最後の段階] 命題との距離という視角、著者の提起したこの二つの視角は、やはり統一できないものであったように思われる。第1の視角はマルクス主義左派と研究者の立場の一体化をもたらし、マルクス主義理論史研究におけるレーニン中心主義を真に克服することができないものであった。第2の視角はレーニン中心主義にたいする異論の提起であるが、レーニン中心主義を真に克服するためには、[帝国主義＝資本主義の最後の段階] 命題の問題性をマルクスにさかのぼって、マルクス主義理論の本質に根ざすものであることを示してほしかった。レーニン中心主義的評

価値基準の打破は、マルクスの理論そのものの根底的検討抜きには成し遂げられないし、マルクスの理論の根底的検討抜きには、現代の危機に対処する「新しい社会理論／思想」の構築もありえないように思われる。

その場合、経済論と革命構想の分離した取り扱いがやはり必要ではないだろうか。経済論をベースとする特有の思考様式であるマルクス主義の特徴を解明するには、やはり経済論固有の領域での徹底的吟味、非マルクス主義的経済認識との比較が重要であると思われる。経済論に定位することで、諸マルクス主義者の議論を検討する際の切込み方が一層深みを増すのではないのか、ひるがえって、経済論と結びつきそれを規定する革命構想の特徴も一層鮮明になるのではないか、さらに、マルクス主義的思考様式の特徴と限界の解明につながっていくのではないだろうか。

註

- (1) 『ドイツ社会思想史研究』（ミネルヴァ書房、1974年）に所収の諸論文。
- (2) 『帝国主義論の史的展開』（現代評論社、1972年）。
- (3) 「バルルスと帝国主義：論文「世界市場と農業恐慌」を中心に」（『経済学研究』第21巻第1号、1971年）および「バルルスと帝国主義：『植民地政策と崩壊』を中心に」（『経済学研究』第21巻第4号、1972年）。
- (4) 蔵田雅彦・門倉正美訳『革命の商人』（風媒社、1971年）。
- (5) 「エンゲルスと「労農同盟」」（『経済学雑誌』第82巻第6号、1982年）、「第1インタナショナルと農民問題」(1)・(2)（『経済学雑誌』第83巻第1号・第2号、1982年）、「マルクス・エンゲルスと農民」(1)・(2)（『経済学雑誌』第84巻第2号・第3号、1983年）。
- (6) 太田仁樹『レーニンの経済学』（御茶の水書房、1989年）148頁。
- (7) 太田仁樹「ロシア・マルクス経済学の展開」（永井義雄編著『経済学史』ミネルヴァ書房、1992年、Ⅳ部第2章）を参照。